



同窓会だより 2022年3月

courrier

No.26

フランス文学科同窓会 <http://www.alumni-aogaku.jp/alumni005/>

Mail

agu.litteraturefrancaise@gmail.com

Twitter

[@agufrancealumni](https://twitter.com/agufrancealumni)

ある同窓生の偉業

青山学院大学名誉教授

石崎晴己 先生

確か生方淳子氏（2 ページ参照）と私は、青学仏文「同期生」になる。1976 年度、氏は学生として入学し、私は助教授として就任した。高校時代より『存在と無』を手に取っていた若き sartrienne たる氏は、3 年になると、『存在と無』を講ずる私のゼミに入ってきた。哲学科ならぬ学科で『存在と無』をゼミのテーマとするという「暴挙」は、仏文科だからこそ、ハイブリッドな文筆家サルトルについてだからこそ許されたわけだが、私としては、差し当たり「専門でございます」と差し出すことができる最良のものは、『存在と無』だった。それでも、サルトルの人気の高さもあり、知的能力・関心の高い青学仏文生は、多数参集したが、最初期の授業では、不器用な新米教師は、白墨片手に黒板の前で立ち往生することもあった。

生方氏は、東大大学院に進み、現在日本有数のサルトル学者として活躍しているが、日本の大学でサルトルに関する授業を受けたのは、（同時期に青学仏文で非常勤でサルトルを講じていた海老坂武氏の授業を除いて）私のゼミが唯一のケースであることが、『戦場の哲学』の「あとがき」に書いてある。東大の大学院にサルトルを専門とする教授がいなかったからである。勢い「恩師」の立場に立つことになった私としては、氏とそれなりの交流を持続けることになる。在外研究でパリに一年滞在した時は、ちょうど氏がパリ第一で博士論文の準備をしているところで、ヴェドリヌ教授にも紹介された。下町の上さんの風貌の教授は、「和製クリステヴァ」たる生方氏の恩師たる私を歓迎してくださり、私はしばらく教授の授業を聴講し続け、ゲスト講師のドザンティの講義も聴いた。その後、日本でもサルトル学会の設立があり、私も例会に参加していたが、氏と一緒に仕事をするのは、最近までほとんどなかった、と言っておこう。

その生方氏から、相談を持ちかけられることとなった。2015 年のことだ。在外研究でパリに滞在中の氏から、サルトル研究の第一人者、ミッシェル・コンタがその春にニューヨーク大学で行なった『存在と無』についての英文講演の原稿を頂戴した、ついてはそれを和訳刊行したいが、相談に乗って欲しい、というのである。私は最終的に法政大学出版局の編集者を紹介し、その結果出来上がったのが、『戦場の哲学』である。



本は、コンタの講演の和訳と解説という出発点から大幅に増殖し、類い稀なる網羅的な『『存在と無』論』となったが、氏が研鑽の蓄積の全てを注ぎ込んだ執筆の過程で、私も助言を求められ、気付いたことは忌憚なく指摘した。特にフッサールとハイデガーに関わる部分では、かなり本腰を入れて精読したものだ。現役を退いた後に、これほどの密度で『存在と無』に取り組むことになるとは思わなかったが、教え子のキャリアを大幅に決定づける画期的な研究の完成と刊行に、曲がりなりにも「恩師」らしき貢献をすることができたことは、「寝覚めの好い」「冥土の土産」となることだろう。

『戦場の哲学』は、世界的にも画期的な著作と思うが、「どうぞお読み下さい」と言われても、そうそう読めるものではなかろう。しかし、「あとがき」は、ぜひ読んで頂きたい。それは、優れたサルトル研究者の自己形成の歴史（自伝）——しかも日本とフランスのサルトル評価の変遷の歴史の中での——であり、研究者とはかく生成するものなのかが、見事に語られている。青学仏文の同窓生の仲間が、本書のような偉業を達成したことは、少なくとも周知に値する。本は、仏文科研究室にも青学図書館にも置いてあるはずである。

トンネルの 先にあった 『存在と無』

生方 淳子

(1980 年卒)

国士舘大学政経学部経済学科教授



私は群馬の片田舎から上京し、自活しながら 4 年間渋谷キャンパスに通いました。実を言えば、国立大学と早稲田大学に落ちて、浪人も許されず不本意入学でした。仮面浪人をしようと考えていました。ところが、その気持ちはいつしか吹き飛んでいました。美しい並木道に明るい声の飛び交うキャンパスに魅了され、新たな友人との出会いに心躍り、大学での学びが受験勉強などよりはるかに面白いことに気づき、ここでの 4 年間で大切にしようと気持ちを切り替えたのです。

私は高校時代からサルトルに惹かれていました。今の自分を超え未だない自分を作っていくという実存主義に勇気づけられ、さらに深くこの哲学を探究したいと望んでいました。仏文の授業では中世から 20 世紀まで数多くの作家に触れましたが、サルトルへの思いは変わりませんでした。

そこで巡り合った千載一遇のチャンスが石崎晴己ゼミでした。翻訳でひとり格闘しても歯が立たなかったサルトル哲学の主著 *l'être et le néant* を原書で読むという挑戦です。

サルトル独自の conscience 概念、即自と対自という二つの存在領域、そして現象学的還元等々について石崎先生は朗々と響く声でじっくりと解説してくれました。哲学書とはこう読むのか、とまさに目を見開かされたものです。

拙著は、この原点から 40 年過ぎて試みた精一杯の跳躍です。『存在と無』がいかにカント以降のドイツ哲学の換骨奪胎であるかを示し、また当時ナチスに占領されていたパリでサルトルが



『戦場の哲学』
『存在と無』に見る
サルトルのレジスタンス

生方 淳子 著
ミシェル・コンタ 序
法政大学出版局 2020 年 10 月刊

いかにナチズムと真逆の人間観を打ち出したかを問いました。

卒業後、東大大学院に進んだのは、サルトルの専門家はいなかったものの、自分が将来研究職に就くために有利だと考えたからです。フランス政府給費生として留学し博士論文を書くことも必要でしたから、なけなしの力を振り絞ってガリ勉をしました。ようやく博論を終えて帰国し、青学での非常勤を経て現在の大学に専任職を得た時にはすでに 38 歳になっていました。

その後、教育・研究を続けながら、結婚、出産、育児と欲張ってきた私ですが、50 代には大きな危機に見舞われました。息子が猛烈な反抗期に突入り、夫に進行癌と転移が見つかり、私自身も更年期、という三重苦で鬱状態に陥りまさに暗黒の日々でした。それ

をどう乗り越えたのか、ここで詳しく語る余裕はありませんが、そのトンネルの先にあったのが『存在と無』でした。この本を読み直し執筆を進めながら、私は自分が自分自身に帰っているという感覚を覚えていました。遠い旅をして、自分でありながら別の人間でもある私へと戻ってきたという穏やかな幸福の感覚でした。

一昨年、ようやく本を脱稿したのと時を同じくして、癌を克服したはずの夫が思いがけない別の病で亡くなってしまいました。しばらく呆然としていましたが、今は気を取り直して大学 3 年になった息子と静かに暮らしながら次の研究書の執筆を進めています。定年まであと 6 年、コロナ禍でハイブリッド授業も試行錯誤中です。

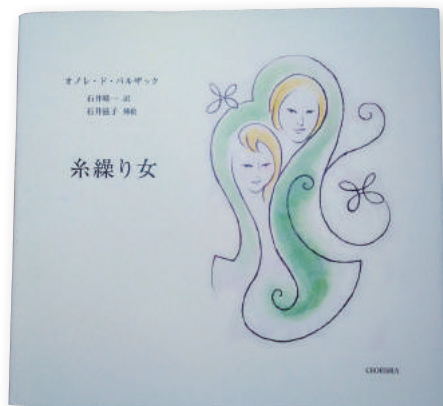
【書評】

生方淳子著『戦場の哲学』

石崎晴己

500 頁に迫る膨大な著書、それが『戦場の哲学』である。主題は、J.-P.Sartre の『存在と無』。日本でこれほどの浩瀚な『存在と無』論が上梓されたのは、未曾有である（サルトルの後期の哲学的著書たる『弁証法的理性批判』については、この限りではないが）。著者は、生方淳子氏。青学仏文を出て（かく言う私のゼミ生だった）、東大の大学院に進まれ、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ第一大学のエレーヌ・ヴェドリーヌ教授の下で、『弁証法的理性批判』についての博士論文で博士を取得され、現在は、国士舘大学教授。本書について、最も肝心のことを一つだけ言うなら、サルトル哲学の生成を、カント、ヘーゲル、フッサール、ハイデガーという四人のドイツ哲学者との対面・影響関係の中で、余す所なく徹底的に検討・分析した周到な論考という点である。後二者はともかく、カントにまで真っ向から取り組んだ『存在と無』論は、おそらく世界的にも例がないのではないかな。

石井晴一先生訳『糸繰り女』のご紹介



『糸繰り女』
オノレ・ド・バルザック 著
石井 晴一 訳
石井 滋子 挿絵
鳥影社 2021 年 4 月刊

バルザック研究の第一人者であり、フランス文学科で長らく教鞭をとられ、9 年前に天寿を全うされました故石井晴一先生（青山学院大学名誉教授）翻訳の『糸繰り女』（オノレ・ド・バルザック著）が、奥様の石井滋子さんの手によって出版されました。美しい挿絵は美術に造詣の深い奥様の作品で、没後 8 年を経て共著という形で上梓されたことに大変心をうたれます。

バルザックにしては珍しい「お伽噺」の本書は、魔女のような糸繰り名人の老婆と酷い仕打ちをうける息子が主人公。その彼が王女と結婚できたのは？

石井先生の「本はね、読まなければ意味がないんだ」（奥様あとがきより引用）の言葉を受け継がれた出版までの道程に大いなる敬意を表し、多くの皆様には是非お読みいただきたい 1 冊です。

『糸繰り女』を振り返る 石井 滋子

「糸繰り女」の訳者、故石井晴一は自他ともに認める読書家であった。その研究範囲は広く深かったにも拘らず、翻訳に限ってはバルザックのみでその数は少なく、こだわりは並外れて強い。中でも最後の「艶笑滑稽譚」は心血を注いだと言ってもいい。本が出版されてしばらくして、岩波の文庫本が出るようになった時、すでに体力をかなり消耗していた彼は原稿のさらなる見直しに持てる力を使い切った。

「糸繰り女」の翻訳がなされたのは、文庫本のゲラが出る直前のほんの短い間のことである。「パソコンに入れておいてくれないか」と、手書きの原稿を私に委ねて彼は文庫本の仕事にかかったのだが、それきり「糸繰り女」に戻ることは無かった。

亡くなって彼の蔵書の整理に 5 年も費やした私は、パソコンに眠ったままの「糸繰り女」をずっと気にかけていた。作品として完結しているにもかかわらず、バルザックのコント・ドローラティックが纏められた時も、翻訳者が亡くなった時も、取り残されてしまう不運な「糸繰り女」を可哀そうに思った。

私は夫の仕事に口を出さない主義である。それが「糸繰り女」に限って、自分で本にしてみようなどと思い至ったのは、原稿を一字一字パソコンに打ち込み、その間得意の想像力を働かせて気儘なイメージを膨らませていたからかも知れない。バルザックが生きていれば、コント・ドローラティック同様ギュースターヴ・ドレが挿絵を書くことになったろうし、その出来栄は私のものとはかけ離れたものだろう。



私は文学的、歴史的な意味にはこだわらず、自分の脳裡に浮かんだイメージだけを、あまり逡巡することなく描いた。なまじ気を遣ったりしたら、みっともないことになっていたかもしれない。

今回、素人が装丁まで引き受けて何とか出版にまでこぎつけたのは、京都の大竹仁子氏（バルザック研究家、エッセイの出版もする）と諏訪の樋口至宏氏（編集、出版の専門家）という得難い助っ人が居てくれたからである。「夫婦の共作」などと言われるけれど、石井は私が本を出すなど夢にも思って居なかったろう。この本は大竹、樋口両氏と私の 3 人の共作と言ってもいい。それほどお世話になった。特筆すべきは、この本がコロナで外出自粛の時期、互いに顔を合わすことなく、「Eメール」と「郵送」と「電話」のみで出来上がったことである。樋口氏に至ってはいまだにお顔を存じ上げない。

出来上がった本が箱詰めされて届いた時、初めて出逢う『糸繰り女』に私の胸は躍った。思いもかけないほど美しかったのが忘れられない。朝日の記者さんに「ご主人はどう言われると思いますか」と問われ、私はつい「『やったね!』と言ってくれるかも」と答えた。しかし、こと勉強だけには厳しい石井晴一は、そんなに手放しで喜んでくれるだろうか。

「バルザックだぜ。こんな子供じみた絵なんかつけて」と苦笑いしている様子がときおり頭の隅をよぎってしまうのは、私の引け目なのかもしれないが。

石井滋子さん
プロフィール

故石井晴一先生夫人
芸大日本画科卒、後に友禅染を学び、
日本画と染色の技術を生かした
作品を精滋子の名で発表

新会長のあいさつ

越坂部則道 (1972 年卒)



このたびフランス文学部同窓会の 4 代目の会長に就任した越坂部則道 (おさかべのりみち) です。会長職を引き受けた理由等についてはホームページに記載しましたので、ここでは繰り返しません。

みなさま方にとって切実なお願いがあります。私は昔から人の顔の識別が苦手でした。数年前、相貌失認ということばを初めて知りました。私の場合、それほど病的だとは思わないのですが、それでも幼いころから顔認識が苦手で、そのせいで何度も失敗を繰り返しました。

致命的だったのは教師になってからです。学生の顔を覚えられないのです。一年経っても名簿の名前と顔が一致しませんでした。ほんとうにひどい教師でした。

そんなわけで、初対面の (と思われる) 人、何度か会った (かもしれない) 人との区別ができず、自分から率先して話しかける行為がこわくてできません。そのせいだと思いますが、よく「冷たい人間」「お高い人」と言われてきました。

会長としてこれから活動するとき、今までの会長のように愛想のよい対応ができないかもしれませんが、それは冷たいからではなく、相手を間違えるのがこわいからなんです。それが習性となってしまいました。

そのような問題をかかえても、会長職を 4 年間一生懸命に努めるつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。

青山学院大学文学部 フランス文学科 同窓会役員	会 長	越坂部 則道 (1972 卒)	幹 事	永澤 富子 (1971 卒)	星加 淑江 (1977 卒)
	副 会 長	牛込 節子 (1972 卒)	鈴木 律子 (1966 卒)	栗辻 和子 (1972 卒)	中島 恵理子 (1981 卒)
		佐野 栄一 (1980 卒)	小島 慶一 (1967 卒)	公山 加代子 (1974 卒)	新井 明峰 (1984 卒)
	会計監査	井上 美知代 (1981 卒)	原田 紀子 (1967 卒)	齋藤 裕 (1974 卒)	相場 久美子 (1985 卒)
		臼井 愛子 (1993 卒)	平 アキ子 (1969 卒)	阿 部 誠 (1975 卒)	

はるばる来ました 25 年。さあこれからが問題です

原田紀子 (1967 年卒)

これまでたくさんの同窓会会員の方に支えられ、25 周年を迎えることができました。

1996 年設立総会開催、パーティにはシャンソン歌手も加わり、ご招待の方を交え 230 名が賑やかに参集。その後は、2 年ごとに総会開催、会報 courrier を毎年発行、現在まで続く「フランス語講座」開設、時には「シャンソン教室」も彩を添えて。懐かしい先生方の同窓祭「公開講座」、また「蚤の市」。フランス文化の薫りを求めている数々のイベント開催…。

気が付くとは移り、変革が求められる時期になりました。大学部会には 23 の同窓会があり、30 年の歴史を持つ同窓会から新設学部が増えてきたばかりの同窓会まで。紙媒体の世代から WEB を自在に操る世代。若い同窓会は先生方との年代が近く交流が盛んで、これが会員を増やす秘訣であるのかもしれません。

そこで私はこんなことを提案しています。

- ・現在のフランス文学部はどんな授業をしているかを調べる。

- ・学科の先生、在学生との交流の可能性を模索し、それを糸口に同窓会の存在を知ってもらい、会員への勧誘をする。
- ・WEB の活用ができるように、会員の皆さまの知恵と技術をお借りする。

会員の皆さま、この活動に少しでもお力を貸してください。今後の同窓会発展のために、同窓会へ提案をお寄せください。また、PC の操作が得意な方、SNS (Instagram、Twitter、YouTube など) にご興味のある方、ぜひご協力をお願いいたします。

関心のある方は、以下のメールにお知らせくだされば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



事務局からのお知らせ

◆フランス語講座開始時期は、コロナ禍の状況により現在は未定となっております。受講生の皆さまには改めてご連絡いたします。シャンソン教室は休止させていただくことになりました。

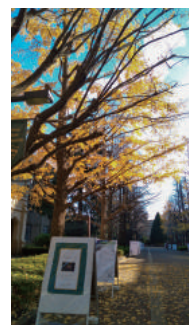
◆2021 年 9 月 23 日に第 28 回青山学院大学同窓祭がオンラインで開催され、フランス文学部同窓会も参加しました。同窓会設立 25 周年を記念して、25 年間の同窓会活動史をまとめたスライドショーを作成しました。同窓生の小関ミオさんのシャンソンをバックグラウンドで流し YouTube 配信した「フランス文学部同窓会の歩み」は好評でした。今年度以降、対面の大学同窓祭が開催されるならば、青山キャンパスのフランス文学部同窓会「お休み処」で、会員の皆さまにこの活動史と現在制作中の「近年の活動の記録」を直接ご覧いただけるよう計画しています。ご一緒に集える日を楽しみにしています。

◆サポート会員のお誘い
卒業生でまだフランス文学部同窓会のサポート会員になられていない方をお誘いください。

2 年会員 2,000 円
10 年会員 5,000 円
終身会員 10,000 円

◆フランス文学部同窓会へのお問合せ、同窓会サポート会員のお申込み、住所や氏名などの変更は、下記までメールでご連絡くださいますようお願い致します。

フランス文学部同窓会連絡先：
agu.litteraturefrancaise@gmail.com



- イベント情報は随時フランス文学部同窓会 HP、Twitter にて更新しています。是非ご覧ください。

青山学院大学フランス文学部同窓会

検索

Twitter @agufrancealumni



courrier No.26

発行月 2022 年 3 月
発行 青山学院大学フランス文学部同窓会
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
青山学院校友会大学部会事務局内
フランス文学部同窓会

連絡先 フランス文学部同窓会
agu.litteraturefrancaise@gmail.com
振込口座 みずほ銀行 渋谷中央支店
(普) 4126617
郵便振替 00150-6-728547
DTP JC ユニット